

明清期の瘟神と医神

その他のタイトル	The Gods of Plague and Medicine in the Ming and Qing Dynasties
著者	二階堂 善弘
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	54
ページ	A27-A42
発行年	2021-04-01
URL	http://doi.org/10.32286/00023724

明清期の瘟神と医神

二階堂 善 弘

The Gods of Plague and Medicine in the Ming and Qing Dynasties

NIKAIDO Yoshihiro

This article explores the gods of plague and medicine in the Ming and Qing dynasties. With regard to the gods of plague, many are known throughout China, including Wangye (王爺) in Fujian and Taiwan, Yanguang Niangniang (眼光娘娘) in the north, as well as Banchen Niangniang (斑疹娘娘), Tainhua Niangniang (天花娘娘), and other niangniang who drive disease. The numerous Yaowang temples across mainland China attest to the belief in these gods. Concerning rituals, the sending off of the royal ship (送王船) is performed to expel epidemics. With regard to the gods of medicine, the kings of medicine (藥王) include famous doctors such as Bian Que (扁鵲), Sun Simiao (孫思邈), Wei Cicang (韋慈藏), and Hua Tuo (華佗). Emperor Baosheng of Fujian was, for example, a well-known doctor who later became a god of medicine. Fictional characters also display traits of gods, such as Lu Yue (呂岳), who appears in the novel *Fengshen Yanyi* [封神演義] and resembles a plague god, as well as Marshal Gao (高元帥) and Marshal Zhang (張元帥) of Marshal God, who resemble the gods of medicine.

キーワード：民間信仰 (Folk Religion)、王爺 (Wangye)、藥王 (King of Medicine)、
娘娘神 (Chinese Goddess)、元帥神 (Marshal Gods)

はじめに

中国の民間信仰の世界においては、疫病や蝗害などに抗するため、その害を退ける神の信仰が発展した。たとえば、蝗の害を退治するには劉猛將軍りゅうもうがあり、疫病に対するには王爺おうやや天花娘てんか 娘にやんなどの神々がある。またこれとは別に、医薬の神に対する信仰がある。すなわち神農大帝しんぬうや薬王やくわう、保生大帝ほせいなどの医神を重んじられた。現在でも、これらの神を祀る將軍廟や薬王廟などが各地に残されている。

こういった神々の信仰が発展したのは、当時の人々がいかに疫病や蝗害などの災害を恐れていたかを示すものであろう。また同時に、しばしば当時の人々がこれらの害に苦しめられていた事実を現すものとする。

一方でこれらの神々は、閻帝や二郎神などのような全国的に信仰が展開する神ではなく、かなり地域性が強い。たとえば、保生大帝や王爺は福建や台湾に信仰の範囲が限られている。

本論は主に明清期みんしんに発展した瘟疫の神と医薬の神の状況について考察し、民間における医薬及び疫病に関する考え方を探るものである。

1 瘟疫神の系譜

『中国民間諸神』においては、神々はその職能に応じて分類されている¹⁾。たとえば丁編には東嶽大帝などの山の神、それに媽祖などの海の神が収録されている。瘟疫の神や医薬の神についても、庚編に瘟神、痘神の項目があり、医王や薬王も、同じく庚編に収録されている。

『中国民間諸神』の瘟神の欄には、主に六朝時代からの瘟神の伝承が載せられている。六朝期から「五瘟使者」という瘟神があったことは、すでに多くの指摘がある。筆者も趙公明の考察を行った時、この五瘟使者についてふれている²⁾。

趙公明自体は、非常に来歴の古い神である。呂宗力氏らの指摘するように、六朝期の『搜神記』や『真誥』にすでにその名は見えている。その後は五名一組となった瘟神の一つとして知られている。『三教搜神大全』には、この瘟神についても「五瘟使者」として別に記録がある。それによれば、五瘟使者の名は以下の通りである。

春瘟 張元伯 夏瘟 劉元達 秋瘟 趙公明 冬瘟 鍾仕貴 中瘟 史文業

1) 呂宗力・樂保群『中国民間諸神』（河北教育出版社、2001年）。

2) 筆者『道教・民間信仰における元帥神の変容』（関西大学出版部、2006年）202-203頁。

趙元帥がこれらの瘟神から発展した神であることは間違いない。ただ、この瘟神としての趙公明と後の「趙元帥」とは、その性格において甚だ異なっており、「同名異神」と言えるほど違う性質を持つものとなっている。なお、これらの神は『武王伐紂平話』にも登場している。なお先に見た雷部の張天君、すなわち張使者の名前は「張元伯」であったが、ここに見られる張元伯がその源流である可能性もある。また、これらの神の名の多くは恐らく、三国六朝期に活躍した人物の名前を変じて作られたものであると思われる。それは「鍾士季」の名が、すなわち三国魏の武将である鍾会の姓と字そのままであることから窺える。

すなわち、瘟疫をふりまく神は張元伯・劉元達・趙公明・鍾仕貴・史文業の五名の使者である。これらの神の名称は、文献によって若干異なっている。なお、『三教搜神大全』の「五瘟使者」の項目には次のようにある³⁾。

昔隋文帝開皇十一年六月、内見五力士現於凌空三五丈、於身披五方袍、各執一物。一人執杓子并甌子、一人執皮袋并劍、一人執扇、一人執錘、一人執火壺。帝問太史居仁曰、此何神、主何災福也。張居仁奏曰、此五方力士、乃天上為五鬼、在地為五瘟、名曰五瘟。春瘟張元伯、夏瘟劉元達、秋瘟趙公明、冬瘟鍾仕貴、総管中瘟史文恭。如現之者、主国民有瘟疫之疾、此為天行時病也。帝曰、何以治之、而得免矣。

隋の文帝の時代、突如巨大な力士が現れ、帝がその詳細について張居仁に尋ねたところ、五瘟使者だと答えたというものである。これらの神々は、瘟疫を流行させるものとして恐れられていた。

なお鍾士季が三国時代の武将である鍾会を指すことはよく知られている。瘟神の人員が『洞淵神呪経』に挙げられている鬼王と重なることについても、すでに指摘されている⁴⁾。

『洞淵神呪経』では、鍾会のほか歴史上の人物が鬼王となって登場し、様々な災厄をもたらすことを説く⁵⁾。たとえば巻七に次のように書かれる。

3) 無名氏『三教源流搜神大全』（中華書局、2019年）136頁。

4) 山口建治「唐代瘟神「五帝」考——御霊信仰の源流——」（『年報非文字資料研究』10号・神奈川大学非文字資料研究センター、2014年）217-232頁。

5) 『洞淵神呪経』については『正統道蔵』洞玄部本文類の『太上洞淵神呪経』を用いた。データについては、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）に所蔵のものを使用している。また『洞淵神呪経』については、菊地章太『神呪経研究——六朝道教における救済思想の形成』（研文出版、2009年）を参照のこと。

自大漢之後、有五通大鬼。鬼名王翦、白起、韓章、樂陽、楚狂。又有郝景、女媧、祝融三万九千人，各領八億万人。

秦の武将であった王翦や白起が含まれ、さらになぜか楚狂^{せつよ}接輿も含まれる。そしてまた、女媧や祝融の名も挙げられている。巻七には続けて次のように説かれる。

国土有大鬼主鄧艾、鍾士季、趙山、王莽、李敖、杜周、劉斗烏、王離、夏侯嬰、蔣公琰、南陽葉公理、夏檀支、蕭何、申屠伯、韓信、田進、梁洪、高沛、孫温、司馬迥、劉元達、有此大鬼、主令世人。或有祠祀武帝、文王、世間供養、立祠不絶。各各有兵馬、為天下人作崇、崇病殺人、年年月月、行千万種病。

鍾会はここで鄧艾らとともに挙げられ、さらに王莽や韓信など多くの歴史上の人物と並ぶ。とはいえ、こういった人選がどういう基準で行われているかは不明である。志半ばで亡魂となった者であれば、それは怨霊としての意味があるのかもしれないが、そうでもないように思える。

これらの記載は『真霊位業図』において、地獄の鬼官に歴史上の人物が列せられる現象とよく似たものである。戦において敗死した怨霊的な人物が多いが、しかし一方で、そういう者ばかりでもない。ただおそらく、五瘟使者の氏名は、こういった記載からの転用であろうと考えられる⁶⁾。

もっとも、これらの古い瘟神は、明清期になるとほとんど顧みられなくなる。なかでも趙公明は、現在ではほとんど財神としか認識されていない。『封神演義』を見ても、趙公明は財神の役職でもって封じられ、瘟疫の神は別に呂岳などが当たることになる。

ただ、現在台湾などで祭祀される五福大帝は、この五瘟使者と同じ名だとされる。或いは五毒大神などとも称される。しかし、これは後に付会されたものであると考える。

また仏典のひとつに『却温黄神呪経』があり、「却温神呪」はよく知られている⁷⁾。ここでの「温神」は、すなわち瘟神である。経典には「当三七遍調此呪経。病毒五温之病、並皆消滅」という字句が見られるが、この「五温」とは、まさに「五瘟使者」のことを指すものと思われる。

6) ここには鍾士季と劉元達の名が見える。趙公明は、趙山から変わったものか、或いは三国六朝の人物名を適宜改変したものか。たとえば三国時代の趙雲の姓と徐晃の字を組み合わせた可能性もある。

7) 教学研究委員会編「『却温神呪』を説論する効果——『仏説却温黄神呪経』訳注——」（『臨済宗妙心寺派教学研究紀要』5号・臨済宗妙心寺派教化センター、2007年）73-89頁。

2 船で送る瘟神

現在、最も広く知られている瘟神は王爺であると考えられる。王爺自体は福建や台湾のみに限られる神で、いまはむしろ台湾における儀礼でよく知られている⁸⁾。台湾では清代から現代にかけて信仰が発展した。その儀礼は「送王船」と呼ばれるもので、瘟神である王爺を船に乗せ、その王船を焼いてあの世に送り返し、疫病を祓う儀式である。また、王船を海に流すこともある。

台湾では王船の儀式はだいたい数年に一度行われる。各廟でその年にはばらつきがある。たとえば、有名な屏東東港の東隆宮における温王爺の祭りは、三年ごとに行われる。



図1 屏東東隆宮

王爺はひとりだけの神ではなく、李王爺、池王爺、呉王爺、朱王爺、范王爺など、様々な姓を持つ王爺がある。俗に三百六十名の王爺があるとされる。また千歳という呼び方もある。廟では、三名の王爺を祀る時は三府千歳とし、五名の王爺を祀る際は五府千歳と称したりする。台南の南鯤鯓代天府は広大な敷地と持つ廟としてよく知られている。

ただ、現在の台湾で王爺が瘟神として扱われているかという点、それについてはやや疑問を感じざるを得ない。この点については少なくない研究者も疑問を抱いているようである⁹⁾。個人

8) 王爺についての論著は枚挙にいとまがないが、ここでは洪瑩發『代天宣化——台湾王爺信仰与伝説——』（博揚事業文化公司、2017年）を主に参照した。

9) たとえば三尾裕子氏は現在の王爺の信仰にあまり瘟神としての性格が見られないことを指摘する（三尾

的には、王爺はむしろ城隍神などの神々に性格に近いように感ずる。

シンガポールやマレーシアにおいては、九皇大帝の祭祀である「九皇船」が行われる。これについて筆者はこう述べた¹⁰⁾。

一方で、李豊楙氏は台湾の王爺と九皇爺の類似性について指摘する。李氏は、台湾で広く行われている王爺の「送王船」行事と、東南アジアで行われる「九皇船」行事の類似に注意し、もともとマレーシアでも王船を作っていたものが、九皇船に変わってしまったということに注目する。実際に、いまはシンガポールやマレーシアでは王船の行事を見ることはほとんどなく、この九皇船の行事に置き換わってしまっているものと推察される。

文中でもふれた通り、李豊楙氏はもともと王船の行事であったものが九皇大帝の行事に置き換わったとする¹¹⁾。九皇大帝が瘟神ではないことは確かで、これは王爺の信仰から派生して別の神に置き換わった事例として考えられる。ただ、送られる神は王爺でなくてもよいわけである。これは興味深い事例である。

王爺の源流のひとつが温元帥であることについては、すでに康豹氏による指摘がある¹²⁾。温元帥は、忠靖王と呼称され、道教においては四大元帥のひとつとされる有名な神である¹³⁾。東岳大帝の配下とされ、むしろ冥界を司る神だと考えられる。先に筆者は王爺が城隍神に近いとふれたが、王爺の性格上、むしろ東岳大帝配下の冥界神という性格が残っているのではないかと考える。

浙江の温州においては、送王船と類似する祭祀が行われていた。その対象であったのは、忠靖王温元帥である。温州で行われたのは「搜耗」と「送耗」と呼ばれる行事である¹⁴⁾。このうち、王爺の巡遊にあたるものが搜耗であり、送王船にあたるのが送耗である。これは紙で造った大きな船を水上に浮かべて焼く行事であり、王船とはやや異なる。むしろ日本の精霊流しの祭礼に近いかもしれない。

このことから、むしろ王船についてはもともと忠靖王、すなわち温王爺に固有の行事であっ

裕子『王爺信仰の歴史民族誌：台湾漢人の民間信仰の動態』2004年東京大学リポジトリ <https://repository.dlitc.u-tokyo.ac.jp/> 16-17頁)

10) 筆者『東南アジアの華人廟と文化交渉』（関西大学出版部、2020年）29頁。

11) 李豊楙『從聖教到道教——馬華社会的節俗、信仰与文化——』（台大出版中心、2018年）210-238頁。

12) 詳しくは康豹（Paul R. Katz）『台湾的王爺信仰』（商鼎文化公司、1997年）参照。

13) 温元帥については、前掲筆者『道教・民間信仰における元帥神の変容』189-200頁参照。

14) 潘陽力「近現代温州的疫災与民間信仰」（『温州職業技術学院学报』第20卷1期、2020年）36-37頁。

たものが、他の王爺に広がっていたのではないかと推察する。さらにその役割が、東南アジアにおいては九皇大帝に変わっていったのではないだろうか。この場合、中核となる「瘟神を送る」という点はかなり薄れ、船を燃やしたり放流したりすることがむしろ中心になってしまっているようだ。

3 疫病を祓う娘娘

河北や山東など中国の北方では、碧霞元君（泰山娘娘）を主とする娘娘信仰の影響が大きい。娘娘とは中国の民間信仰で祭祀される女神のことである。古来の神々でも、女神の場合は多く娘娘と称される。たとえば、西王母は「王母娘娘」、女媧は「女媧娘娘」、九天玄女は「玄女娘娘」などと呼ばれることが多い。

ただ、明清期に発展した娘娘は、これらの古来の女神とはまた異なるものである。また地域性が高い。現在の北方の多くは三娘娘の祭祀が中心であり、碧霞元君、眼光娘娘、子孫娘娘の三柱の娘娘を祀る。眼光娘娘は眼病を治す神で、子孫娘娘は子授けの神である。

これとは別に五娘娘を祀る場合もある。北京郊外の妙峰山の娘娘廟本殿には、碧霞元君、眼光娘娘、子孫娘娘、斑疹娘娘、送生娘娘の五娘娘を祀る。



図2 妙峰山廟の斑疹娘娘と子孫娘娘

このうち病気に係わる神は、眼光娘娘と斑疹娘娘である。北方では、眼病を治す眼光娘娘の信仰はかなり強い。数多くの娘娘廟で見かけるものである。斑疹娘娘は皮膚に係わる病気に対

処する女神である。このほかに、天花娘娘、またの名を痘疹娘娘があるが、これは天然痘を退治する神である¹⁵⁾。

澤田瑞穂氏の記すところによれば、かつて北京の蟠桃宮には数多くの娘娘神が祀られていたが、ここには、王母娘娘、碧霞元君を中心として、脇には眼光娘娘、斑疹娘娘、痘疹娘娘などの神が祀られていた¹⁶⁾。

清代になると、三娘娘が三体で祀られることから、これが『封神演義』の三娘娘と混同されることが多くなる。『封神演義』に登場する三娘娘は、雲霄娘娘、瓊霄娘娘、碧霄娘娘の三名で、三霄娘娘と称される。三人は姉妹で、趙公明の妹である。

廟によっては、明らかに碧霞元君、眼光娘娘、子孫娘娘の像であるにもかかわらず、雲霄、瓊霄、碧霄と見なしているところもある。眼光娘娘が眼を、子孫娘娘が子どもを抱えているという、明らかな像の差異にもかかわらず、三霄娘娘とされてしまうことは問題ではあるが、これも『封神演義』の影響の大きさを物語るものであろう。

4 薬王廟の神々

薬王廟は、中国大陸のあちこちで見られる廟である。独立の廟というより、関帝廟や娘娘廟に付設される場合が多い。

先にふれた北京妙峰山にも、薬王殿がある。ここでの薬王は扁鵲^{へんじやく}であり、いまでも扁鵲の像を祀る。

『中国民間諸神』によれば、薬王と称される神は三神がある¹⁷⁾。ひとつは扁鵲。扁鵲は古代の伝説の名医で、様々な病気を治癒したという。『史記』にもその名は見えるが、活躍した年代はいまひとつ明確でない。

もうひとつは、初唐の頃の道士、孫思邈^{そんしぱく}である。こちらは実在の名医であり、しばしば皇帝に召されても応じなかったという。『千金要方』などの著作にても広く知られている。宋の徽宗の時に妙応真人の号を与えられたとされる。

もうひとつは韋慈藏^{いじぞう}である。こちらは扁鵲に比してはやや知名度が低いかもしれない。唐の則天武后の頃の人であるという。やはり名医であったとされ、多くの伝説が残っている。

概して名医の伝説が残されている人物は、薬王廟において祀られることが多い。扁鵲や孫思邈のほか、華陀、董奉、張仲景^{かだとうほうちようちゆうけい}などである。

15) 奥村義信『満洲娘娘考』（第一書房、1982年再刊）181頁。

16) 澤田瑞穂『中国の民間信仰』（工作舎、1982年）44-45頁。

17) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』435-437頁。



図3 大石橋の薬王殿に祀られる華陀・孫思邈・李自珍・扁鵲

華陀については、これも実在の名医であるが、いまはむしろ『三国演義』の故事で知られているかもしれない。

『三国演義』においては、関羽が矢傷を受けて負った毒を、華陀が治療する話が非常によく知られている¹⁸⁾。

方巾闊服、臂挽青囊。自言姓名、乃沛国譙郡人、姓華、名佗。字元化。因聞関將軍乃天下英雄、今中毒箭、特來医治。(略)公飲数盃酒畢、一面仍与馬良弈棋、伸臂令佗割之。佗取尖刀在手、令一小校、捧一大盆於臂下接血。(略)佗乃下刀割開皮肉、直至於骨、骨上已青。佗用刀刮骨、悉悉有声。帳上帳下、見者皆掩面失色。公飲酒食肉、談笑弈棋、全無痛苦之色。

華陀が矢傷を治療している時、関羽は馬良と碁を打っていた。骨を削るような治療であったにもかかわらず、関羽は普段と変わらぬ態度であり、この様子には華陀も驚いたという話である。

ただこれはすでに指摘されている通り、史実とはやや異なったものである。関羽の臂を治療したのは別の医者であり、華陀ではない。『三国演義』では、その後曹操の頭痛を治療しようとした華陀が、疑われて獄に下された話が描かれているが、こちらは史実に基づいた話である。

18) 『三国演義』第七十五回（上海古籍出版社、1989年）973-974頁。

さらに、もうひとつ薬王殿に祀られることが多いのが、『本草綱目』の著者である李時珍^{りじちん}である。李時珍は、やはり名医として知られる人物である。明代の人物であり、薬王とされるのは、おそらく清代になってからである。

5 保生大帝と神農

福建地域及び台湾で広く信仰される医神は、保生大帝である。保生大帝は名を呉本^{ことう}といい、漳州の名医で、伝承では宋代の人物とされている。



図4 マラッカ保生大帝廟

保生大帝については、台湾台北の保安宮が広大な廟として有名である。また台北三大祭りの行われる廟でもある。この保生大帝については、筆者は以前別の著作において、その来歴を考察したことがある¹⁹⁾。

保安宮の主神は保生大帝である。その信仰圏は福建においてはそれほど広くはない。ただ台湾においては移民がその廟を数多く建設した結果、全土で信仰される神となった。台湾にはこの台北保安宮の他、台南学甲鎮の慈濟宮、台南市興濟宮、高雄湖内長壽宮・普濟宮・慈濟宮など、由来の古い廟が数多く存在し、台湾全土では、二七三座の廟があるとされる。

19) 筆者『アジアの民間信仰と文化交渉』（関西大学出版部、2012年）175-176頁。

台湾全土と比較すると、南方、特に台南・嘉義両県にその廟が偏在している傾向があるものの、台湾でもっとも著名な神の一つでもあることは確かである。またシンガポールの天福宮などにおいても祀られている。保生大帝は福建地方の医神として著名な存在である。伝によれば、保生大帝は姓を呉、名は本、字は華基、号は雲東。また大道公・呉真人・呉真君・英惠公などとも呼ばれる。『続修台湾府志』によれば次の通りである。(略) これらの史料によれば、保生大帝・呉本は、宋の太平興国四(979)年に生まれ、医術を修めて人を救い、景祐二(1035)年に亡くなった後、祭祀されて神となったとのことである。生前名医であったことから、医術の神として盛んに信仰されたとされる。また福建省同安県の出身であり、地方神としての特色が強い。

その信仰は、東南アジアのシンガポールやマレーシアにも広がっている。ペナンやマラッカには、あちこちに保生大帝廟があり、医薬の神として祀られている。

ただ、保生大帝は薬王と組み合わせて祀られる例は少ないように思われる。保生大帝廟では、台北保安宮がそうであるように、後部に神農を祀ることが多い。

神農は有名な三皇のひとつであり、そもそも薬の発明者であることから、医薬の神としても広く祀られる。しかし、民間信仰においてそれほど信仰は強くはない。

台湾の三重にある先^{せんしよくきゆう}齋宮は、「神農大帝」を主神として祭祀する。しかし、そこでの扱いはむしろ農業神としてのものである。そのため呼称も「五穀先帝」というものであった。医薬の神としては、むしろ保生大帝廟に併祀されるほうが多いかもしれない。

神農はまた日本でも医薬の神として祀られる。東京湯島の湯島聖堂の神農廟がよく知られている。また、大阪道^{どしやうまち}修町の少彦名神社は、日本の医薬の神である少彦名命を祀るとともに、神農も祀る。近くの住民からは「神農さん」とも呼ばれている。この地区一帯は、いまでも薬品関連の会社などが多く、「薬の町」として知られている。

6 趙公明と呂岳

趙公明は、先に見たように五瘟使者のひとりとして、瘟神の性格を持つものであった。しかし、現在の廟においては、趙公明は専ら財神として扱われ、財神殿に祀られるのが一般的である。清代以降、関帝と趙公明を武財神とし、比干を文財神とし、この三柱の神に財富を祈願することが標準になっていく。

この問題については、すでに多くの研究者による分析がある²⁰⁾。六朝期には、そもそも財富を司る神があるという意識自体が希薄であったと考えられる。呂威氏の指摘によれば、民間信仰において財神が信奉されるようになったのは、北宋の時期であるとされる²¹⁾。

古い財神としては、増福相公として祀られる李詭祖^{りきそ}がある。

これは、北魏の県令であった人物であるが、死後その徳が讃えられ、神となった。いまでも財帛星君といえはこの神を指す。『三教搜神大全』にもその名は見えている。この神は、唐代には財神に封ぜられたとある。またもうひとつは、五顯財神であり、こちらも来歴の古い神である。おそらく財神として扱われたのは、宋代以降のことと考えられる。

ただ、これらの神々よりも、唐代において財富の神として認識されたものはあったと考えられる。それは、仏教の毘沙門天と大黒天である。

この両神は、日本では七福神に含まれる。日本の人々からすれば、この両神が福の神、すなわち財神の性格を有することは理解しやすいと考えられる。しかし、中国において毘沙門天は四天王のひとつとして扱われ、さらに大黒天はほとんど仏寺で見られない神格となっている。そのため、その性格についてもあまり理解されていない。

毘沙門天はインドの財神クベーラが伝来したものとされる。すなわち、もともと財神の性格を有していた。大黒天はマハーカーラ神が源流であり、自在天の化身であるが、これも性格がやや変じて財神の性格を持つに至っている²²⁾。

そして財神大黒天が変じて、財神趙公明となった可能性については、澤田瑞穂氏がすでに指摘している²³⁾。宋代以降、趙公明の姿は黒面に鞭を持ち、黒虎に乗るというものであるが、これは五瘟使者のどの姿にも一致しない。すなわち、趙公明は澤田瑞穂氏が述べるように「同名異神」に近いものとなってしまっている²⁴⁾。

そして、黒面や憤怒相は、むしろ大黒天と趙公明に共通するものである。中国で大黒天がほとんど祭祀されなくなってしまった原因のひとつには、この大黒天の「趙公明化」があると考えられる。

そして、清代以降の民間信仰に強い影響力を行使した『封神演義』においては、趙公明は截

20) 呂威『財神信仰』（学苑出版社、1994年）12-25頁、及び崔良斌「財神趙公明形象的演變過程及其淵源」（『咸陽師範學院學報』第27卷5期、2012年）67-71頁参照。

21) 前掲呂威『財神信仰』1-3頁。

22) これについて、弥永信美は「クベーラの大黒」と表現し、分析を行っている。詳しくは弥永信美『大黒天変相』（法蔵館、2002年）481-495頁参照。

23) 前掲澤田瑞穂『中国の民間信仰』104-116頁。

24) 前掲澤田瑞穂『中国の民間信仰』106頁。

教側の道士として登場する。そのあり方は完全に財神としてのものである。

『封神演義』では最後に、陣没した者の多くを封神し、天界の役職に就けるわけであるが、趙公明と関連する四名は財神とされる。すなわち、趙公明が金龍如意正一玄壇真君に、蕭昇が招宝天尊に、曹宝が納珍天尊に、陳九公が招財使者に、姚少司が利市判官に封じられる。現在、多くの廟では、この五名を「五路財神」として祀っている。

一方で、『封神演義』では疫病を司る神は別に存在し、封神によってその地位に就けるが、その主となるのは呂岳である。呂岳は物語のなかで、疫病を流行させて周の軍を苦しめる役割を持つ²⁵⁾。

呂岳乘了金眼駝、也在当中、把瘟丹用手抓著、往城中按東西南北、洒至三更方回。不表。且説西岐城中、那知此丹俱入井泉河道之中、人家起来、必用水火為急濟之物、大家小戸、天子文武、士庶人等、凡吃水者、滿城尽遭此厄。不一二日、一城中煙火全無、街道上并無人走。皇城內人声寂靜、止聞有声喚之音。相府內衆門人也逢此難。內有二人不遭此殃、哪吒乃蓮花化身、楊戩有元功變化。故此二人見滿城如此、二人心下十分著慌。

この段の描写では、呂岳は病気の原因となる毒を井戸に投げ、そのため西岐の城内の人々はすべて疫病に罹患したのだとする。哪吒と楊戩だけは、常人と異なる身体であったため、病気になるのを免れている。

呂岳は最後に瘟癘大帝の地位に封じられる。同時に、周信は東方行瘟使者に、李寄は南方行瘟使者に、朱天麟は西方行瘟使者に、楊文輝は北方行瘟使者に、陳庚は勸善大師に、孫通は和瘟道士に封じられる。これらは瘟部正神として扱われることになる。ただし、『封神演義』では疫病に関する神々はまた主痘正神があり、こちらは余化龍親子が封じられている。

このように、『封神演義』においては疫病を司る神々が設定されてはいるものの、それは呂岳を中心とした別の神になっている。趙公明は、全く瘟神としての役目を失ってしまっているのである。

それでは呂岳などが、いま廟で瘟神として扱われているかということ、その例はあまり見ない。『封神演義』の影響力は大きかったものの、他の瘟神に取って代わるほどのことはなかったように思える。

『封神演義』の物語のなかでは、疫病が流行したときは、結局神農の薬によって治療を行って

25) 『封神演義』(江蘇古籍出版社、1991年) 489頁。

いる。このあたりは、伝統的な神農の役割そのまま登場している。

7 その他の医神

『中国民間諸神』には、薬王以外にも、いくつかの医薬の神が記載されている。

そこには、元帥神のひとつである高元帥の記載もある。高元帥は、温元帥や趙公明など、他の有名な元帥神に比して知名度が低く、またそれほど廟で祭祀されているわけではない。むしろその神像を見ることは少ないと言ってよい。武将の姿を取ることが多い元帥神のなかで、おだやかな白面の書生風の姿をしており、逆に目立つ存在である。

『三教搜神大全』には、高元帥の説話が見えているが、やはり医術に絡むものである²⁶⁾。

帥受氣於始元太乙之精、托胎於蒼州高春公家。母梅氏、甲子年十一月甲子日子時、生下一
 団火光曜日。父母以為怪、投之江、藥師天尊抱之為徒。貌如冠玉、法名員、授仙劑以遊世。
 (略) 玉帝憫其為仁亦苦矣、以為足為帝之心為物造命者、遂封以九天降生高元帥之職。

生まれてすぐ、その怪奇なることを怪しまれ、父母に捨てられるが、薬師天尊の徒弟となる。長じては医師となり、多くの人々を治癒した。死後、功績が玉皇大帝に認められ、神となった²⁷⁾。高元帥は、子どもの病気を治す役割で知られている。

この説話に登場する薬師天尊という神については、他の資料にはあまり見えないものである。薬師如来の別称か、あるいは薬王に類する神かは不明である。

『中国民間諸神』には痘神の項目もあり、ここでは先にもふれた『封神演義』の余化龍親子の記載もある。ただ、元帥神のひとつである張元帥の記載もあり、これもまた痘神の一種であるとする。『三教搜神大全』によれば、張元帥は名を張純、山東の人であった。玉皇大帝は張元帥を「理麻痘役」の号を与え、痘神としたという²⁸⁾。『中国民間諸神』によれば、この他に満洲地域で鄧將軍が痘神とされ、また金元七総管も痘神の性格を有するものであった。

また『中国民間諸神』には薬王菩薩についての記載もある。さきにふれた薬王韋慈蔵のところで、同名の薬王とされる韋善俊も、時に薬王菩薩と呼称されていたようである²⁹⁾。

薬王菩薩は仏教の菩薩であり、多くの仏典にその名称が見えている。『妙法蓮華経』には、「薬

26) 前掲無名氏『三教源流搜神大全』190頁。

27) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』443頁。

28) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』400-401頁。

29) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』442頁。

王菩薩本事品」があり、そこでは薬王菩薩の功德について詳しい話が載せられている³⁰⁾。

宿王華、若有人聞是薬王菩薩本事品者、亦得無量無辺功德。若有女人聞是薬王菩薩本事品、能受持者、尽是女身、後不復受。若如来滅後後五百歳中、若有女人聞是經典、如説修行。於此命終、即往安樂世界、阿弥陀仏、大菩薩衆、圍繞住処、生蓮華中、宝座之上、不復為貪欲所惱、亦復不為瞋恚愚癡所惱、亦復不為憍慢嫉妬諸垢所惱、得菩薩神通、無生法忍。得是忍已、眼根清淨、以是清淨眼根、見七百万二千億那由他恒河沙等諸仏如来。(略) 此菩薩成就如是功德智慧之力。若有人聞是役王菩薩本事品、能隨喜讚善者、是人現世口中常出青蓮華、身毛孔中常出牛頭栴檀之香、所得功德、如上所説。是故、宿王華、以此薬王菩薩本事品囑累於汝。我滅度後後五百歳中、広宣流布於閻浮提、無令断絶、惡魔、魔民、諸天、龍、夜叉、鳩槃荼等、得其便也。

薬王菩薩と薬上菩薩は兄弟であるとされる。日本の寺院には、薬王菩薩と薬上菩薩の像が対になって祭祀されることがあるが、類例はあまり多くない。また薬王菩薩の像は、中国ではそれほど一般的なものではないようで、筆者は中国の寺院や廟で、これまでほとんど見たことがない。この薬王菩薩が、徐々に民間における薬王神に変じていった可能性は高いが、まだ不明確な点が多い。

おわりに

瘟神は疫病を流行させる存在であるが、また祀ることによって疫病を防ぐ存在ともなる。医神が治療する対象は疫病に限らないが、病気を防ぐ存在として祀られることになる。ただ、広い範囲で祭祀される医神はそれほど多くない。神農や扁鵲など、ごく一部の神である。他の多くは、その地域特有の医神である。

瘟神や医神以外の一般的な神に対して疫病を防ぐ役割を与えることもある。よく知られているのは、マカオの聖ポール天主堂跡(大三巴牌坊)の隣に祀られる哪吒太子で、清代に疫病の難を免れたとして建てられたものである³¹⁾。このように、ある程度有名な神々は、疫病を祓う役割も期待されることがあった。

むろん、疫病の退散を瘟神や医神に祈ったとしても、現代の目から見ればそれは効果のない

30) 『大正大蔵経』第九冊No.262鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』第六・薬王菩薩本事品(中華電子仏典協会CBETA <http://www.cbeta.org/> のデータによる)

31) これについては、胡国年『澳門哪吒信仰』(三聯書店、2013年)を参照のこと。

ものであったかもしれない。ただ、それは当時の人々にとっては重要なことであり、かつ有意義な行為であったと考える。さらに、人々がいかに疫病を忌避していたかも、そこから読み取ることができるのである。